静日（黒斑山の中腹より）

百八十ミリのレンズでは、この広い山体を包括するには引きが足りないので、反対側の急な黒斑山の中腹までよじ登って三脚を据える。烈（はげ）しい西風に噴煙が絶えず吹拂（ふきはら）われているので、シャッターを握ったまま一時間近くもチャンスを待った。しかしできたものを比較してみると、自分が望んだ高く噴煙が立登ったものより、この方が真実性があってよかったと思う。自然の描写はいつでも真実に忠実であるべき事をつくづく教えられた作品である。

解説：田淵行男

撮影：1940 年（モノクロ写真）

田淵行男作品集 Vol.1 より

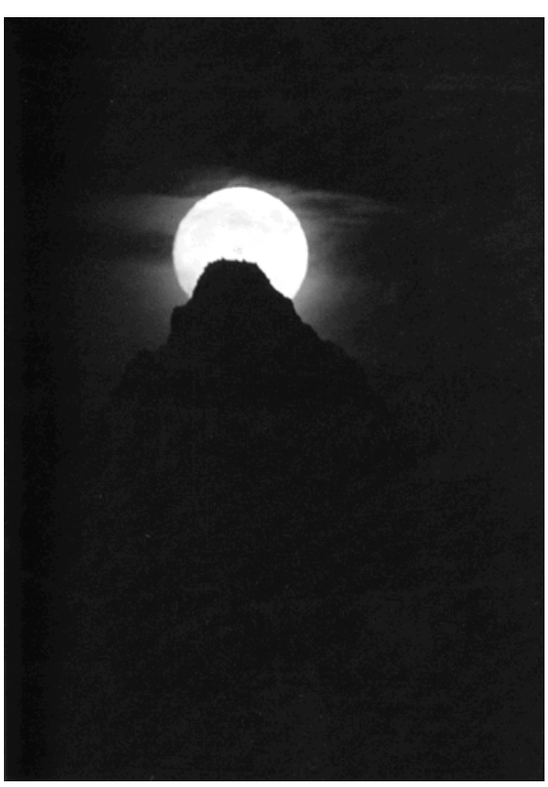
夏の剣　立山　1942 年（モノクロ写真）

田淵行男作品集 Vol.1 より

愛用のカメラとピッケル

細密画　オオルリシジミ

山を遠ざかって山を眺める季節
山を離れて山を想う季節
田淵行男



槍が蒼然（そうぜん）と暮れてゆく
穂先だけに残照の紅をとどめて
その時　突然左の肩に白い光が走った
月だ
その日の満月は
左の稜線をはい登って
正しく頂上から沖天に躍り出した

私の 40 年の山旅で巡りあった
最高の時刻
最上のショー
大自然の絶妙な演技に
心の中で拍手喝采（かっさい）を送りながら
私はシャッターを押しつづけた
その日
1966.7.31
その時
午後　7.14
その所
樅沢岳（もみさわだけ）頂上

田淵行男作品集 Vol.1 より

槍に昇る月（樅沢（もみさわ））

カラー写真